

モミイチの世界

——「星の牧場」と音楽——

宮崎節二

『くオカイコポルカ』ってどういう曲かね』と夏頃、本学の中西先生から質問され、「なんですか、それは」と逆に質問した覚えがあるが、私の所へ、庄野英二文学がこのような、かたちでとびこんできた。その他、中西先生の質問をならべると、まず「私は音楽がよくわからない」と前置きしながら、オーケストラのねらいは何だろう。メンバーは多いほど良いのか。自分は単一の楽器の方が親しみやすいが、「星の牧場」にはたくさんの楽器が出てくるが、オーケストラの楽器はあれですべてですか。またモミイチの鈴は、ジブシーのオーケストラでどんな役目をするのだろうか。「星の牧場」がオーケストラをとりあげたねらいは、人との協調、調和などの気持が養成されるからだろうか。物語の中で四分の二拍子から四分の三拍子になったら、かもしかがひっくりかえるとか、バイオリンでカイコやカマキリが踊るなんて話があるが、本当にありうるのか。この作品はミュージカルになったというが、君ならどんなものに創るか。以上、素人っぽい質問だが考えてくれないかということだった。これらの疑問に答えるために、とにかく一度読んでみることにした。

戦争経験のない私には、この物語を適確に理解することが出来ないかも知れないが、とにかくモミイチの音楽世界に入りこんで見た。戦争に行つて記憶をうしない、残っているものと言え、彼の耳の中に、馬蹄の幻聴だけであった。この純粹で素朴な音の理解者モミイチが、山の牧場をベースにいろんな人々とあい、音の経験をしていくのである。われわれは音楽を芸術とし、規則を作り、ねりにねって音を創りあげていくが、モミイチのそれはまさに音そのものである。私がこの本を読んで、一番気がついた点はそれであつて、その象徴がモミイチの作った鈴であると思う。あの美しい音だけを求めて、コツコツ努力し、なんどもなんども作り直して作っていく、モミイチの雑念のない耳。またアンコロンの音をこよなく愛す抒情的な心で作っていく、牛の首につけられた美しいすばらしい鈴が、音の輪を自然を通してひろがっていくだろうと思った。

自然と音楽、自然と人間、そのはしわたしを音が受けもっている。この関係を美しく、また広範囲にわたる知識でまとめあげた庄野文学に賞賛をおくりたい。そして、なによりもうらやましいのは、たくさんの楽器を片よることなく、すなおに登場させていることである。やゝもするとわれわれは、自分の楽器中心に考えるところがあるものである。

羊を追いながら、またミツバチをつれていきながら、こういった世情をある程度気にしないで、自然のサイクルに合わせて生活できる人々が、楽器を練習し、より集つて合奏する、なんとすばらしいことか。どのようなメソードによるものかとか、はたして正しく音楽が理解出来て、いつているのだろうか。こんな疑問が、非常にくだらなく思えてしまう。

このすばらしい世界を、心にとめて、私もなるべく、モミイチの心を持つ時間を多くし、努力したいと思う。

高松短期大学研究紀要

第 6 号

昭和 51 年 3 月 1 日印刷

昭和 51 年 3 月 10 日発行

編集発行 高松短期大学
〒761-01 高松市春日町 960

印刷 新日本印刷株式会社
高松市木太町 2158